

復 命 年 月 日	令和8年2月27日（金）
出 張 年 月 日	自 令和8年1月30日（金） 至 令和8年1月30日（金） 1日間 宿泊 無
用 務 地	長崎県東彼杵郡波佐見町、長崎県諫早市
用 務	広報広聴委員会委員会行政視察
て ん 末 （資料添付）	<p>○長崎県東彼杵郡波佐見町：1月30日（金）10時～12時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：議会の広報広聴活動について ・目的：議会だよりの編集体制や発行スケジュール、住民目線の広報の工夫、議会モニター制度など、議会広報広聴の取り組みについて調査し、本市議会の広報活動の向上に資すること。 ・内容 <p>【質問】（1）議会だよりの編集体制について</p> <p>【回答】波佐見町議会では、全議員が広報委員となり、その中から編集委員を選出して作業を行っている。一般質問は1人1ページを基本とし、各議員が責任を持って原稿を作成する体制を取っている。以前は編集委員が他の議員の原稿を大幅に修正していたが、現在は自己責任の原則を徹底し、作業負担の軽減と意識向上を図っている。</p> <p>【質問】（2）編集作業の流れとスケジュールについて</p> <p>【回答】定例会終了後、広報編集委員会を複数回開催し、紙面構成や特集内容を決定する。原稿は事務局から業者へ送付され、初稿が完成後、タブレット上で全議員が確認し、共有メモ機能で修正点を記入する。最終的には業者立会いのもとで最終確認を行い、定例会翌月の月末には完成するスケジュールとなっている。</p> <p>【質問】（3）発行部数と経費、業者選定について</p> <p>【回答】印刷業者は入札により決定しており、基本的には最も低価格の業者が選定される仕組みとなっている。現在の業者は対応が良く、柔軟に要望に応じてもらえているため、紙面の質を維持できているとのことであった。</p> <p>【質問】（4）住民に届くまでの配布方法について</p> <p>【回答】議会だよりは自治会長会を通じて各世帯へ配布される仕組みとなっている。そのため、発行自体は早まっても、実際に各家庭へ届くまでには時間差が生じる。補完策として、完成後は速やかにホームページやLINEで公開し、早期に閲覧できるようにしている</p> <p>【質問】（5）紙面づくりで工夫している点について</p> <p>【回答】町の広報紙と一目で区別できるよう、表紙には地元の波佐見高校美術工芸科の作品を採用している。これにより、議会だよりの独自性を高めるとともに、地元高校のPRにもつながっている。また、文字ばかり</p>

にならないよう写真やイラストを多用し、見出しだけでも内容が伝わるレイアウトを意識している。

【質問】(6) 住民の声の反映について

【回答】議会モニター制度を導入し、議会だよりへの意見を収集している。また、アンケートや特集記事を通じて、住民の関心の高いテーマを紙面に反映させている。物価高騰など、生活に直結するテーマを取り上げることで、住民目線の紙面づくりを心がけている。

・所感

波佐見町議会では、議会だよりの編集を議員主体で行い、1人1ページの原稿作成を徹底することで責任意識の向上と作業効率化を図っていた。また、タブレットを活用したペーパーレス編集や、地元高校と連携した表紙づくりなど、独自の工夫が随所に見られた。特に、住民目線を意識した特集やアンケートの実施、議会モニター制度による意見収集など、広聴機能の充実は参考となる取り組みであった。本市議会においても、議員一人ひとりの責任ある原稿作成の徹底や、読みやすく親しみやすい紙面構成、住民の声を反映した特集企画などを検討し、議会広報の充実と市民への情報発信力向上につなげていく必要があると感じた。

○長崎県諫早市：1月30日（金）14時30分～16時

・テーマ：議会の広報広聴活動について

・目的：議会だよりの編集体制や発行方法、SNSを活用した情報発信、議会報告会の運営手法など、議会の広報広聴活動の取り組みについて調査し、本市議会の広報広聴活動の充実・改善に資すること。

・内容

(1) 議会だよりの発行体制について

【質問】発行スケジュール、発行部数、年間コストはどのようになっているか。

【回答】年4回発行しており、編集は委員会を4回程度開催し、その後メールによる最終確認を行って発行している。発行部数は約4万7,800部で、1回当たり20～24ページ程度。年間コストは1ページ当たり約2.4円で算出されている。現在は一部カラー印刷であるが、全面フルカラー化に向けてコストとのバランスを検討中とのことであった。

(2) 議会だより作成時の役割分担について

【質問】委員、委員会、事務局、印刷会社の役割分担はどのようになっているか。

【回答】基本的な編集・確認作業は議員が行い、一般質問の記事は各議員が執筆している。「追跡一般質問」や「議会クイズ」、「編集後記」などは委員による輪番制で担当。事務局は原稿の確認、文字数調整、執行部との調整、議案ピックアップ記事の作成などを担う。印刷会社は校正後のレイアウト調整や図表の作成などを担当している。

(3) 表紙写真の選定方法について

【質問】議会だよりの表紙はどのように選定しているか。

【回答】市内高校の写真部などに依頼し、提出された写真の中から委員会で選定している。季節感や構図、広告看板の写り込みなどを確認しながら協議して決定。若い世代に政治や議会に関心を持ってもらうきっかけ

づくりとしても位置付けている。

(4) 特集記事や連載企画の決定方法について

【質問】 特集記事や連載企画はどのように決めているか。

【回答】 年間で固定したテーマは設けず、その都度委員会で意見を出し合いながら決定している。10代から高齢者まで幅広い年代が読む媒体であるため、内容が固定化しないよう配慮している。

(5) 読みやすさ向上の工夫について

【質問】 読みやすさ向上のためにどのような工夫をしているか。

【回答】 文字量をできるだけ抑え、1ページに写真やイラストを入れることを意識している。専門用語は注釈を付けるなど、分かりやすい表現を心掛けている。また、一般質問の写真も、質問後の記念撮影から、実際の発言中の写真へ変更し、臨場感を出す工夫を行っている。

(6) 議会クイズ・お便りコーナーの課題と対応について

【質問】 応募者や投稿者の固定化への対応はどうしているか。

【回答】 掲載する意見を選定する際に固定化しないよう配慮している。また、インターネットからの投稿も可能とし、幅広い層から意見を受け付ける体制にしている。批判的意見も含めて全議員で共有しているが、個別回答は行っていない。

(7) 音訳の取り組みについて

【質問】 音訳を導入した経緯と運用方法はどうか。

【回答】 合併前から実施しており、20年以上継続している。図書館内で音訳作業を行い、年間約31万6千円で委託契約を結んでいる。

(8) SNSによる情報発信について

【質問】 Facebookの運用体制と投稿内容はどうか。

【回答】 令和元年10月から運用開始。投稿内容の選定や作業はすべて議会事務局が担当し、議長決裁後に投稿している。定例会情報や行政視察の受け入れ、委員会活動などを発信している。フォロワー数は約345名で、投稿への反応は10～20件程度。コメントには原則返信していない。

(9) 議会報告会の運営について

【質問】 議会報告会の実施方法や課題は何か。

【回答】 議会基本条例に基づき年1回以上開催。これまで地域対象、団体対象、常任委員会単位など、複数の方式を試行してきた。若者や女性の参加促進を目的に団体方式へ変更したが、参加人数減少などの課題も生じた。近年は常任委員会の政策提言活動と連動した意見交換形式で実施している。今後は集客方法や内容の工夫が課題とされている。

(10) 市民意見の反映について

【質問】 議会報告会で出た意見はどのように活用しているか。

【回答】 班ごとに報告書を作成し、全議員で共有。市議会だよりやホームページで公表している。また、常任委員会の政策提言書作成時の参考として活用している。

(11) 議会資料の公開方法について

	<p>【質問】 議案書や議会だよりの公開体制はどうなっているか。</p> <p>【回答】 クラウド型文書共有システムを活用し、議員用と市民用の閲覧領域を分けて運用している。議会だよりは配布日に合わせて事務局が公開設定を行っている。議案書などのデータは執行部が作成し、事務局がアップロードしている。</p> <p>・所感</p> <p>今回の視察を通じ、議会だよりの編集においては、議員が主体となって作成に関わり、役割分担を明確にしながら継続的に改善を行っている点が印象的であった。また、表紙写真に高校生の作品を採用するなど、若い世代に議会を身近に感じてもらう工夫がなされており、広報のあり方として参考になる取り組みであった。議会報告会については、対象や形式を柔軟に見直しながら実施しており、市民の声を政策提言に生かす仕組みづくりが進められていた。一方で、参加者の固定化や集客の課題も共有されており、これは本市においても共通の課題であると認識した。また、SNSの活用やクラウドによる情報公開など、時代に即した情報発信の手法を取り入れている点も参考となった。今後は、本視察で得た知見を踏まえ、「議会だよりのさらなる読みやすさの向上」「若い世代を意識した広報手法の検討」「市民参加型の議会報告会の充実」「デジタルを活用した情報発信の強化」などに取り組み、市民に開かれた議会運営の推進に生かしていきたい。</p> <p>※ 広報広聴委員会各委員の報告・所感については別紙のとおり</p>
--	---

提出者：西田 晃一郎

広報公聴委員会行政視察

所感

1. 波佐見町議会

議会だよりの表紙について地元の高校の美術部に依頼し、高校のPRと生徒の確保を兼ねている点は、市内の高校の写真部や美術部に相談してみたいと思った。

一般質問の欄の「つぶやき」は、大刀洗町議会を参考にしたとのことであったが、TTP（徹底的にパクリ）を実行されていて本市においても取り入れたいと思った。

発行までの期間の短縮に努めたり、議会だよりのコンビニエンスストアへ設置したりするなど、住民への情報発信について住民の立場に立った様々な工夫は、見習いたいことが多くあった。

傍聴者を増やす取り組みは、新聞に折込むなど議会から住民への歩み寄りを感じた。

2. 諫早市議会

クイズコーナーや一般質問の追跡、お便り紹介コーナーなど、ユニークな企画で住民との双方向のやりとり（コミュニケーション）が図られているのは今後、取り入れたいと思った。また、各コーナーの担当の輪番制は、すぐにでも取り入れたいと思った。

行政視察のみならず、他市町の議会だよりを参考にし、クオリティの維持に努められていることは、見習いたいと思った。

Facebookの運用については、事務局職員が行っているため、本市においては負担が大きすぎると感じた。今後、議会のDXが進めば、事務局の負担がほとんどないカタチで運用できるかもしれないと考えた。

3. まとめ

今回の行政視察において、共通の悩みや課題を共感するとともに、これまで気付かなかった視点や住民に有益になる情報提供の工夫は、とても参考になり、できることから取組めればと思った。

広報広聴委員会 行政視察報告書

児玉

1. 視察目的

本市議会だよりの充実及び、より市民に開かれた議会広報のあり方を検討するため、先進的な取り組みを行っている波佐見町議会を視察し、編集体制や運営方法等について学ぶことを目的に実施した。

2. 視察日

令和8年1月30日

3. 視察先

長崎県波佐見町議会（広報広聴委員会）

4. 視察内容

波佐見町議会では、議員全員が広報広聴委員会に所属し、その中から編集委員を選出する体制を取っている。各議員が自身の一般質問や議会活動について責任を持って原稿を作成し、内容の正確性や伝わりやすさを意識した紙面づくりが行われていた。編集作業は明確なスケジュールに基づいて進められ、タブレット端末を活用した校正作業により、作業効率の向上とペーパーレス化が図られている点が特徴的であった。また、事務局は全体調整や事務的支援に徹し、議会主体の広報活動がしっかりと確立されていると感じた。さらに、議会だよりの表紙には地元高校生の作品を採用するなど、若い世代や地域とのつながりを意識した工夫がなされており、議会への関心を高める取り組みとして大変参考になった。

5. 所感

今回の視察を通じ、議会だよりは単なる活動報告ではなく、「市民に議会を身近に感じてもらうための重要なツール」であることを改めて認識した。特に、議員一人ひとりが原稿作成に責任を持つ体制は、議会全体の発信力向上につながるとともに、広報広聴委員会の円滑な運営にも寄与していると感じた。本市議会においても、議会だよりの役割を再確認し、市広報との差別化を図りながら、より分かりやすく、伝わる広報を目指して、今回の視察内容を今後の委員会活動に活かしていきたい。

広報広聴委員会 行政視察報告書

見玉

1. 視察目的

諫早市議会における議会だよりの編集・発行体制や SNS(Facebook)を活用した情報発信、議会報告会など市民との対話の取組みについて学び、本市議会の広報広聴活動の充実につなげることを目的に実施した。

2. 視察日

令和8年1月30日

3. 視察先

長崎県諫早市議会

4. 視察内容

諫早市議会では、委員主体で編集・構成を行い、事務局は調整・確認を担当する体制となっており、写真や図表を多用し、読みやすさを重視した誌面づくりが行われている。一般質問は議員本人が原稿を作成し、「質問後の対応・経過」を追跡掲載するなど、市民に分かりやすく伝える工夫がなされている。また、表紙写真には市内高校の写真部等に撮影を依頼し、若者の参画意識向上と親しみやすい誌面づくりをはかっている。SNS(Facebook)については令和元年に開設し、議会事務局職員が議会日程や活動報告など速報性のある情報発信している。

さらに、議会報告会は平成25年から実施されており、地域対象型と団体対象型を組み合わせて開催し、市民の意見を聴取している。

5. 所感

委員主体での編集体制により、議会の考えや活動が市民に伝わっている点が印象的であった。また、紙媒体・SNS・対話の場を役割分担して活用している点や、一般質問の「その後」を可視化する取組は、本市議会においても参考となる。

今後は、若者を含めた幅広い世代に届く広報の在り方や、市民意見を政策に反映させる仕組みづくりなど、市民に開かれた議会を目指し、広報広聴活動のさらなる充実に取り組んでいきたい。

波佐見町議会

議会だよりの表紙を、地元唯一の高校である波佐見高校の生徒の作品を定例化し掲載されていることは、波佐見町の高校へ通っている生徒への感謝の気持ちを表すこと、若い世代やその保護者にも議会だよりを開いていただくこと、定番の表紙によって議会だよりを印象付けることなど、様々な効果があると思いました。

また、一般質問の新聞折込や、全戸に設置してある無線放送での定例会のお知らせなど、議会に関心を持ってもらう取り組みを積極的に行われていたので、伊万里市議会としても検討の余地があると感じました。

諫早市議会

議会報告会「わがまちトーク」について、地域ごとに行っていた報告会を、各種団体・グループとの意見交換会方式に転換をされたが、その後再度地域ごとの開催に戻されていた。どこの議会も参加者の固定化や、政策提言に向けた調査研究としての意見交換会の位置づけに苦慮し試行錯誤されているのだと感じました。

Facebook の運用に関しては、事務局負担が大きいこと、フォロワー数の伸び悩み、議会 HP との情報発信の差別化など、その活用に関しては課題が多いと感じたので、伊万里市議会として SNS での情報発信を検討する場合は、何を目的にどのように運用するのかについてよくよく議論して実施する必要があると考えます。

(所感) 波佐見町議会の議会便りで特筆すべきことは、表紙を地元の波佐見高校美術工芸科に依頼して、生徒さんの入選作品の写真と顔写真まで掲載していることであろう。生徒さんのモチベーションも上がるし、何より入選したことの告知にもなり、一石二鳥であると思う。

また、議員自らが町内のコンビニに議会便りを持ち込み、設置していただいていることも大事な活動である。

町民アンケートや議会モニターによる意見にも積極的に取り組んでおり、その意見にも真摯に耳を傾け、改善を図っていることは、ぜひ本市でもすぐにでも取り組んでいけることでもあり、大いに参考になった。

議会便りの中の、各個人の一般質問のページでは、なんと1ページ自由に使え、各々写真を数枚使ったり、表やグラフまで掲載されており、実に市民の皆さんにとって分かりやすいページになっていた。このことから、情報発信に欠かすことのできないツールとなるため、一般質問を毎回する議員の数が多いことに繋がっていると考えた。波佐見町議会の広報広聴活動における取組は、総じて本市でもすぐに取り組んでいけることであり、これからの活動に活かしていきたい。

長崎県諫早市 議会の広報広聴活動について

(所感) 諫早市議会の議会便りでは、追跡一般質問コーナーの作成に目を惹かれました。

一般質問は聴いて終わりではなく、それによって改善されることが目的である。そして改善されたことを、市民の皆さんに知っていただくことは、我々にとってなによりの励みになると考えます。

その他にも議会クイズの作成やお便り紹介コーナーといった斬新な取組は、ぜひ本市においてもやってみたいと思う。

議会報告会わがまちトークでは、参加対象を地域から各種団体へ、そしてまた地域へと試行錯誤しながら行っているが、開催することの意義や検討課題を見つけ、それを改善していく姿勢には頭が下がる。今後もどのように展開していかれるのか見守っていききたい。

本市においても Facebook や議会報告会においては、遅れを取っているのが現状であるが、本市ならではのやり方を提案していきたい。

広報広聴委員会 波佐見町議会 視察所感(木寺)

波佐見町は統一感のある美しい街並みが印象的で、そうした町の姿勢が議会広報にも反映されているように感じられた。これまで仕事や私用を通じて訪れる機会も多く、伊万里市とのつながりの深さを改めて感じる地域である。

議会だよりは、かつてのモノクロからカラー化され、表紙デザインも定着し、住民の目に留まりやすい工夫がなされている。編集作業にはタブレット端末が活用され、スケジュール管理や校正作業が効率化されている点は非常に先進的であった。共有メモ機能を使った修正指示や、最終的には紙媒体での確認を行うなど、デジタルとアナログを適切に使い分けているようで、伊万里市議会のタブレット導入の参考にもなった。

編集体制については、議長を除く全議員が広報委員として関わり、各自がページを担当する方式に変更されたことで、責任感の向上と負担軽減が図られている。議員自身が原稿に責任を持つことで誤りが減少し、内容の質も高まっているとのことであった。特に一般質問を一人一ページとする構成は、グラフなどの視覚的要素を取り入れやすく、住民にとって理解しやすい紙面づくりにつながっていると感じた。

また、波佐見高校との連携により、生徒の作品を表紙や裏表紙に掲載している取り組みは、議会だよりの独自性を高めると同時に、地域の若者の活躍を町民に伝える素敵な試みである。写真やイラストを効果的に使い、文字ばかりにならない紙面構成を意識している点も、「読まれる広報」を強く意識していることの表れであると感じた。

傍聴者増加に向けては、新聞折り込みチラシや防災無線による告知を行い、議会開催を町全体に周知している。質問項目を事前に知らせることで住民の関心を高める工夫は、伊万里市議会においても取り入れる価値が高いと感じた。

一方で、自動文字起こしの精度向上と職員の修正作業の課題など、現実的な悩みも率直に共有されており、どの議会にも共通する課題であると実感した。

総じて、波佐見町議会の広報広聴活動は、デジタル技術の積極的活用と、人の手による丁寧な確認や工夫が見事に融合していると感じた。単なる情報発信ではなく、「どうすれば住民に届くか」「どうすれば関心を持ってもらえるか」を常に考え続けている姿勢こそが、広報の質を高めると改めて実感した。

今回の視察を通じ、伊万里市議会においても、編集体制の見直し、視覚的に伝わる紙面づくり、デジタル化の段階的導入、そして住民との双方向性を意識した広報戦略を進めていく必要性を強く感じた。広報とは単なる報告ではなく、市民と議会をつなぐ大切な架け橋であることを改めて胸に刻み、今後の広報広聴活動に活かしていきたい。

広報広聴委員会 諫早市議会 視察所感(木寺)

議会だよりの発行体制や議会報告会をはじめとした市民との対話の取組について視察を行った。

まず、議会だよりの発行体制について。伊万里市議会と同じく議員自らが一般質問の記事を執筆し、事務局と連携しながら編集を進めている。特集記事を固定化せず、その都度委員会で企画を決めることでマンネリ化を防いでいるとのこと。文字を大きくし、写真やイラストを多用しながら、専門用語には注釈を入れるなど、10代から高齢者までを意識した紙面づくりへの工夫には、読む側への配慮が感じられた。特に、市内高校の写真部や新聞部の作品を表紙に採用する取組は、地域とのつながりを深める優れた工夫であると感じた。

一方で、市民から「縦書きと横書きが混在して見にくい」といった率直な意見が寄せられている点は、私自身も共感するところであり、読みやすさの追求は常に改善を重ねていく必要があると改めて認識した。一般質問の記事に録画映像へつながるQRコードを掲載している点は、紙媒体とデジタルをうまく融合させた好例であり、伊万里市議会でもぜひ取り入れたい工夫である。

情報発信の手段としては、議会だよりに加え、Facebook や電子書籍サービスを活用した資料公開など、多様な媒体を使っていることが印象的であった。しかし、これまでいくつかの自治体を視察する中で感じるのは、「議会としての Facebook 運用のメリット」とは何か、ということ。ホームページにある程度内容を掲載した上で、Facebook はどのような扱いになるのか。発信していることがそのまま「説明責任を果たしている」とは言い切れないという課題も感じるところである。いただいた資料にもあったが、諫早市議会においての Facebook 運用の目的として「意見を収集し、関心を高めてもらう」とある一方で、コメントには原則返信しないとの説明もあった。質問した後に、運用目的との整合性は…と、少し考え込んだところである。改めて、「伝えたつもり」ではなく「伝わったかどうか」を検証する視点の重要性を強く感じた。情報を公表するだけでなく、市民が理解し、関心を持ち、行動につながる形にしていくことこそが本質であると考えてるので、今後の自分の発信にも生かしたいところである。

議会報告会については、開催形式を時代や状況に応じて変化させながら模索を続けてきた経緯が紹介されたが、参加者の固定化や減少という課題は全国共通の悩みであると感じた。「全市民」を対象とした周知の難しさは伊万里市議会においても同様であり、常任委員会ごとの意見交換会がその時のメンバーによって実施頻度に差が生じている現状も、今後整理していく必要があると感じた。市民の声をどのように拾い上げ、政策へとつなげていくのか、その仕組みづくりがより一層求められている。

この視察を通して強く感じたのは、「伝える努力」を続けることの大切さと同時に、「伝わっているか」を振り返って検証し続ける姿勢の重要性である。紙面の工夫、媒体の使い分け、市民との対話の場づくりは、いずれも完成形はなく、試行錯誤の積み重ねである。諫早市議会の取組から学んだ工夫と課題の両面を、伊万里市議会の広報広聴活動に生かし、市民により近く、より開かれた議会を目指していきたいと強く感じた。

広報広聴委員会行政視察報告書

川添 智徳

1. 波佐見町議会(長崎県東彼杵郡波佐見町)

議会だよりの編集作業において特色すべき点が数点あった。まず、表紙の選定方法は地元波佐見高校美術工芸科の生徒の作品を絵、焼物、デザインの順番で採用していて、それぞれ全国の作品展やコンクール等で賞を取ったものが多かった。今後も質の高い作品作りを支援するために、町より年間約2000万円の補助金を拠出していた。

また、議会だよりの作成にあたっての広報委員は議長以外の11名全員で構成されており、更にその中から5名が編集委員として作業されていた。

議会だよりの校正については一般質問コーナーが各議員に1ページ与えられており、質問内容と執行部からの回答もより鮮明に充実した内容であった。伊万里市議会の議会だよりの大いに参考にしてよいのではないかと感じた。

2. 諫早市議会(長崎県諫早市)

諫早市議会の議会だよりの作成にあたっては、紙媒体である冊子とSNSのFacebookを活用し両方で情報発信をしているところであった。今後、本市においても応用できないかと思った

また、議会報告会の一環として「市民と議会のわがまちトーク」を平成25年から毎年開催し、その内容も大変充実したものであった。

それぞれ本市においても今後応用できないかと思った

松尾 伸人

令和8年1月30日（10:00～12:00） 波佐見町議会（長崎県）

（説明内容）

- ① 表紙は、町広報紙との差別化を図る事を意識している。
 - ・一目で「議会だより」とわかる様に。
 - ・波佐見高校美工科に作成してもらっているが、絵→焼物→デザイン画のローテーション。（波佐見高校には、2千万円／年を町から補助。）
- ② 入札で印刷業者を選定しているため、価格が安い業者が受注しているが、多少、金額が高くても、デザインが優れている場合もあり、悩ましいところ。
- ③ 発行は議会の翌月末を発行日としているが、配布は自治会長会なので、翌々月の14日頃となる。
 - ・全戸配布＋コンビニ6店舗に5部ずつ配布（議員が持参）
- ④ ページ数は18ページを基本としているが、一般質問者の数によって、ページ数が変わる事がある。
 - ・一般質問は、基本的に11名全員で議長も行うが、前回は8名。質問者が原稿を作成する。
- ⑤ 広報編集委員会で、**SideBooks**の共有メモを利用して、委員全員で編集の確認を行う。
- ⑥ 町民目線という事を第一に、アンケート結果やタイムリーな情報を掲載する様に心がけ、基本的には業者任せだが、見出し、レイアウトの工夫をしている。
- ⑦ 一般質問の「つぶやき」欄は、大刀洗町を参考にしたもので、議場で言い足りなかった部分や、執行部回答に対しての感想を掲載している。
- ⑧ 議運の発案で、新聞折り込み広告にて、一般質問の事前告知をしている。
- ⑨ 全員が、広報委員という意識を持つ事が重要と考えている。

（所感）

議会だよりの実物は、フルカラー刷りという事もあり、確かに洗練されている印象を受けるが、これは、やはり「議員全員が広報委員」という意識を持って取り組まれている成果の表れではないかと感じた。

また、タブレット端末を令和4年から導入されているとの事で、**SideBooks**の共有メモを利用して、自宅で校正案を考えメモする事で委員会の前に、原稿や意見を確認、共有する事ができる点は、委員会の効率化、内容の充実に大きく役立っているものと推察された。

令和8年1月30日(14:30~1600) 諫早市議会(長崎県)

(説明内容)

- ① 人口12万3千人(伊万里市の約2倍)で、議会だよりは基本的には全戸配布だが、自治会に入られていない家には配布できていない。
- ② 第1回委員会が議会開会初日、第2回が閉会日で記事選定、紙面構成確認までを議会中期間中で実施。
- ③ 追跡一般質問コーナーの「あの質問どがんだったと？」を設け、過去の一般質問について、その後経過を調査し、掲載している。
- ④ 表紙については、市内の各高校の写真部または新聞部へ依頼し、第3回目の委員会において、選定している。
- ⑤ 議会クイズを実施し、賞品を出す事で議会だよりに関心を持ってもらう様になっている。
 - ・賞品は500円の図書カードで、1回5人が当選。
- ⑥ 議会だよりのWeb版は音訳を実施。
- ⑦ 議会の広報広聴活動の一環として、FaceBookページを活用し、情報発信を実施している。
- ⑧ 議会報告会“市民と議会の「わがまち」トーク”を実施しているが、対象者を当初は対象地域の市民としていたものから、各種団体へと方針転換した。(理由は出席者の固定化と高齢化。)

(所感)

議会だより発行のスケジュールについて、第1回委員会を議会開会日、第2回を閉会日に行って、記事選定、紙面構成まで行っているという事で、一瞬「早い」と思ったが、発行日が翌々月末(昨年第4回定例会後の発行日は今年の2月末)という事であり、全体としては、我々の方が短期間で発行できている。

但し、諫早市も波佐見町と同じく、たよりの記事校正についてはSideBooksを利用されており、DX化による委員会の効率化は進んでいると感じられ、過去の一般質問の追跡コーナーや議会クイズの実施については、参考になるものと思った。

また、議会の広報広聴活動として、Facebookページ(SNS)の活用や各種団体との意見交換会についても、今後の我々の検討課題であろうと感じた。